「日本研究」大学院生ワークショップ
3 月 11 日（月）—12 日（火）

2024 年 3 月 11 日から 12 日にかけて、シカゴ大学と東京大学が合同で開催する「日本研究」大学院生ワークショップが開催され、計 12 名の大学院生による発表が行われた。当研究室からは田中浩喜氏と私（伊藤優）が発表者として参加した。私は今回の発表で、元・明の類書（百科事典的な書物）と江戸の手品の解説書の比較を通じ、日中の呪い、占い、手品の関係を探ることを試みた。ネイティブチェック付きの、本格的な英語での発表は初めての経験であったが、参加者の院生や先生方の優しさにより、なんとか発表を終えることができ、また多数の有意義な質問をいただいた。

他の院生の発表では、日本の影響下で作られた朝鮮の病院に関する研究や、サイバーパンク表現とアジアの関係の研究など、さまざまな視角での研究報告があり、興味深かった。本ワークショップでは、共有された論文を事前に読んで、質疑や議論に積極的に参加することが求められており、タフだが刺激的なセッションであった。

12 日に全員の発表が終了した後、エクスカーションも行われた。雨天のため、皇居付近の散策は中止として、博物館見学を中心とした。東京駅付近にあるインターメディアテクでは、現地の学芸員の方の案内のもとで、過去の東大の建築物や教室などの貴重な品々を見せていただき、貴重な体験となった。上野の東京国立博物館においても、中尊寺金色堂の特別展を他大学の院生と共に鑑賞することができ、同行者に依る体験の変化を感じられた。夕方、大学に戻ってからは、院生の発表にちなんでポチョムキンの映像を見た後、共に本郷通りの中華料理屋に繰り出し、意見交換や交流の場を持つことができた。このような機会は、コロナ禍のオンライン発表会ではなかなか得難いため、特に印象に残っている。

先述の通り、本ワークショップはややタフであるが、その分学習効果が高く、また他の院生や先生方と深い交流を持つことができ、極めて有益であった。今後もこのワークショップや他の交流セッションが継続的に開催され、また院生が積極的に参加することを願う。

文責：伊藤優